

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

A Report on the Reproduction of a Gutskin Bag

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 市川, 秀雄, 弥富, 静江, 齋藤, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005857

腸皮製バッグの製作に関する報告

市川 秀雄*・弥富 静江**・齋藤 玲子***

A Report on the Reproduction of a Gutskin Bag

Hideo ICHIKAWA, Shizue YATOMI and Reiko SAITO

This article is a report on the reproduction of a gutskin bag which was modeled after a Western Alaska Eskimo artifact stored in the Hokkaido Museum of Northern Peoples. ICHIKAWA succeeded in preparing the gutskin from a Sea lion and YATOMI made it into a bag after several attempts.

There is a little information about gutskin or intestine as materials, also as actual artifact in Japan. The experience and learning from the making processes is valuable and such a model bag is useful for the museum.

1. はじめに ー本報告の趣旨と意義ー (齋藤)

本稿は、2006年12月に北海道立北方民族博物館に寄贈された「腸製バッグ」複製過程の報告である。素材のトドの腸を加工処理した市川と作成者の弥富が工程の詳細を記録として残すとともに、博物館資料の活用例として紹介するため、共著の形で報告することにした。

北方民族博物館は5点の腸製¹⁾とされる衣服(パーカ)と2点の小袋(バッグ)を所蔵しており、うちパーカ2点とバッグ1点を常設展示している。これらは素材の珍しさとともに仕立ての細やかさなどから、展示資料の中でも観覧者の関心が高く、質問を受けることも

* 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園技術専門職員
(Botanical Garden, Field Science Center for Northern Biosphere, Hokkaido University)

** 手工芸家

*** 北海道立北方民族博物館主任学芸員 (Hokkaido Museum of Northern Peoples)

キーワード 腸皮、内臓膜、海獣、トド、模造バッグ

Key Words Gutskin, Intestine, Marine mammal, Steller's sea lion, Model bag

多い。しかし、動物の（外側の）皮革に比して、内臓の皮を利用した製品は実物資料も関連する文献も少なく、十分に答えられる情報を持たずにいた。

今回、当館所蔵資料（資料番号H5.23）を模した製品を作る過程で、実物の観察や文献の記述からのみではわからない点について、市川・弥富は実験・試行を重ねた。この体験と得られた知見は貴重なものとする。完成品も、素材の質・縫製の技術ともに、原資料に劣らぬものであり、参考資料として価値あるものと思われる。

以下に、その詳細を報告する。執筆の分担は1と4が齋藤、2が市川、3が弥富である。謝辞および文献は、三者のものをまとめて記載した。

2. 素材サンプルとしての腸皮製作について（市川）

2-1はじめに

北方地域に暮らす先住民族はその生活のいたる所で生物資源の恩恵を多く受けている。陸上資源も重要であるが高緯度、寒冷で生物の生産性が低いことから、水産資源とくに海洋性生物資源を多く利用している。海の生物資源は生産性も高く、北方域という厳しい環境のなかで暮らす人々にとっては衣、食、住と生活を広範囲に支えることができる。なかでも海獣類の用途は大きく、また商業的にも高い価値を生んでいる。北方域で暮らす人々はこの環境の中で培ってきた生活の知恵を向上させ、あらゆる生活物資をも生み出してきたのである。このことは残された貴重な資料の中から見る事が出来るし、現代でもその技術は引き継がれている。

筆者が勤務する北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・博物館（以下、植物園・博物館）は開拓使から現在の北海道大学に引き継がれた施設で、明治期からの資料を多く保有している。この中には北方少数民族の資料も含まれており、その収集年代の古さから物質文化研究の上で欠くことのできない資料群として評価されている。なかでも魚皮衣、鳥皮衣、獣皮衣などは世界的にみても貴重な資料といえるだろう。

これらの資料管理にあたっている筆者らにとっては、研究利用者への対応に際して単純な保存管理と提供だけでなく、利用者が必要とする情報の提供や助言といった活動も重要と位置づけており、文献や素材などの参考資料の収集にも力を入れているところである。この収集活動の過程で、筆者が近年関心を抱いてきたのが動物由来の素材からなる民族資料である。関心を抱くようになった理由のひとつは、研究利用者からの質問の増加である。植物の繊維を用いた資料は数多く残されており、研究の蓄積もなされているため情報も豊富であるのに対して、動物由来のものはシカ、トナカイの脚等の腱が利用されているといわれているものの、それに関する情報は乏しい。それゆえ、利用者の多くも明確な判断を下すことが困難で、質問されることが多々あるが、返答に窮する事が多い。植物園・博物館が研究利用者からの信頼を得る施設となるために、それら動物由来の素材を用

いた民族資料が、北方域の人々の暮らしの中でどのようにして生まれ、活用されてきたのかという背景を含め、基礎的な情報を把握しておくべきであると考えた。また、動物学標本を多数所蔵する施設として、民族学と動物学の結節点となるような動物由来の標本・資料の充実を図り、利用に供してゆくという使命の実現にも寄与できると考えたことも理由のひとつといえる。

以下、民族資料等の素材を検証するための資料収集を目的として、2000年1月より実施したトドの腸の加工・製作工程についての報告を行うこととしたい。

2-2素材について

(1) 材料の入手

材料の入手は、有害駆除されたトドを対象として、海獣の体内に蓄積された有機塩素系化合物の研究を進めていた北海道大学水産科学研究科学生星野広志氏の協力を得て行った。

提供を受けたトドの腸は、2000年1月26日羅臼沖で採集された体長245cmの雌の個体のものである。現地で解体され取り出された腸は、冷凍された状態で植物園・博物館に送付されてきた。その時点で迅速な対応が取れなかったため、冷凍したまましばらく保存することとした。

(2) 処理作業について

はじめに冷凍状態のまま腸の重さを量り、これを80ℓのポリ容器に入れ、水を張って解凍した。腸間膜及び腸内容物を含めた腸の総重量は14.8kgあり、解凍された腸の一部には裂けたところ、短く切れているものもあったが状態は概ね良好だった。

この腸を使い腸皮の加工作業を2002年12月より以下の工程で実施した。

①腸間膜から腸管を切り離す

解剖バサミを使い、腸管を腸間膜との接点で切り離した。腸管はねじれたり潰れたりしないよう腸間膜によって体内に吊り下げられている。この接点を切り離すことによって一本の長いホースのようにすることができる。腸管はおおきく小腸と大腸の二つに分けることが出来るが、この時点で腸管全体の長さを測った。この個体の小腸の長さは82.7mで、大腸は4.2mであった。筒状の腸管の太さは部位によって異なるが、小腸および大腸の直径は、おおよそ前者は1.7~2.2cm、後者は5.0~6.0cmであった²⁾。

②腸管を切り開く

筒状になっている腸管を、腸間膜との接点を目安に切り開き、一枚の帯状にする。接合部は血管等が集中し組織が若干厚いこと、また腸間膜との接点がハサミを入れる目安となることから一直線に切ることができる。

③水洗い

切り開いた腸管内部の消化物など汚れを洗い流す。

④腸管内外の組織を取り除く

腸管内外の組織を、市販の皮スキベラを用い組板のような平らな板の上ですくようにして取り除き、半透明の白い粘膜下層のみとする。(以下、この粘膜下層を腸皮と呼ぶこととする)。刃の付いたものを使うと腸皮が切れるので注意する。(図1)

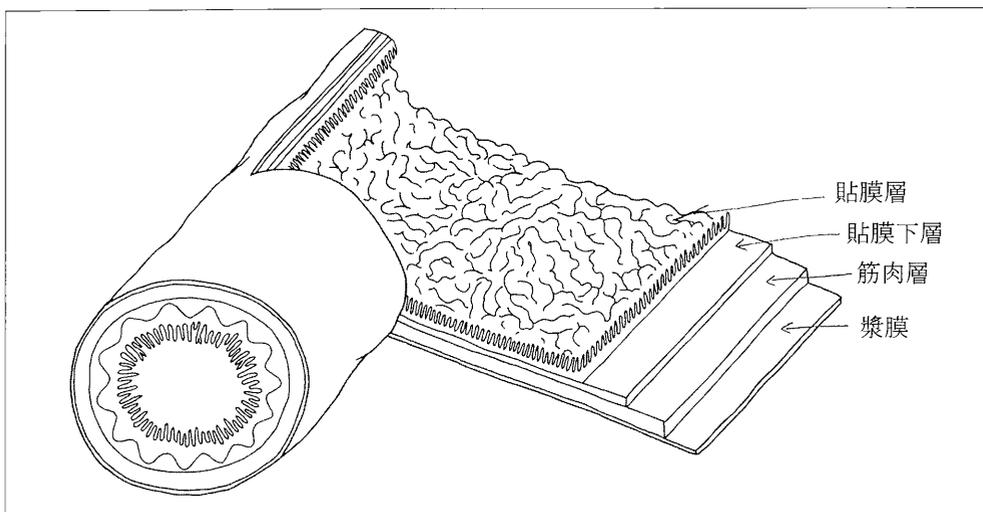


図1 小腸組織断面

⑤水洗い

腸皮に残っている血管などの浮いた組織をハサミで丁寧に取り、水で十分に洗い汚れをとる。

ここで乾燥させるための板材・温度について検討するため、次のような2~3の予備実験を行った。

処理を行った腸皮(小腸部の長さ950mm、幅50mmのもの)を木の板に貼り、室内温度約20度で乾燥した。その結果、木の板は腸皮が広げやすく水分を吸収してくれるので貼り付けやすいが、乾燥した腸皮は全体的に歪みができ巾が5mm縮んだ。また、部分的に板に貼り付くため剥がれなくなった。乾燥時の収縮は腸自体の性質もあり、特に問題視しないが、板に貼り付くことは剥がすときに腸皮が破れてしまうので、別の方法を検討する必要が生じた。そこで木の板と同じようにガラス板、アクリル板を使って実験した結果、それぞれ水分をはじく性質があり、貼る段階で均整が取れず、また乾いた部分からはがれてくるので歪みも大きくなった。またスチール製書架の棚板を使った場合、表面にざらつきがあり、腸皮が広げやすく貼り付きは良いものの、はがれにくい部分も若干できた。いずれの乾燥用板材においても、室内温度20度では5~6時間程度で乾燥した。

上記の処理方法は、室内で乾燥させるため臭いの問題が生じたこと、また20度という温

度下で乾燥させていることにより、歪みが大きく、平らで良好な状態に仕上げるのが困難であることが判明した。そこで、5~6度の涼しい部屋でスチール製棚板を用いて乾燥処理を行った結果、歪みも少なく、平らに仕上げる事が出来た。また貼り付きも乾燥状態を見計らい、ある程度の透明感がでてきたところで部分的にピンセットを用い乾燥用板材から浮かせることで解消された。乾燥用板材に貼り付いた原因として、水洗いでは腸皮についている水溶性タンパク質（コラーゲン）が十分とりきれず乾燥時に接着剤の役割を果たしたと推測されたため、何らかの処理を施す必要があると考えられた。

予備実験で確認された腸皮の特徴を踏まえ、以下の工程で作業を進めることとした。

⑥脂肪除去作業

浸透性の高い界面活性剤の多く含まれる家庭用食器洗い洗剤20mlを50℃のぬるま湯30ℓに溶かし、そのなかで腸皮をもみ洗い、泡立ちがなくなるまでよく濯ぐ。この作業を3度繰り返し、さらに水にさらして1週間置いた。

この作業は、予備実験の際に検討課題となった、腸皮の脂肪分等を含めたタンパク質を取り除くために行ったものである。また水に浸けることも、タンパク質を取り除くため有効と考え実施した。

⑦乾燥

スチール製書架の棚板を用い、切り開いた腸皮の内側面を棚板に貼り付け、外気温にほぼ等しい状態にある倉庫内で自然乾燥を行った。スチール製棚板は表面が少しざらつき、貼り付き具合がよかったことで選んだ。貼り付くのを防ぐために、乾燥して薄茶色の半透明の状態になったことを見計らって部分的に浮かせた（乾燥は2002年12月9日に開始し、温度6~-4℃の倉庫で、69時間乾燥させた）。

⑧風乾

乾燥後においても腸皮に海獣特有の臭いが残っていたので、事務用ダブルクリップで挟んで束にした状態で吊るして風乾・陰干しした（2003年1月から5月まで屋内外で風乾）。臭いは僅かに残るだけになった。

⑨標本整理箱に入れ保存

最終的に出来上がった腸皮は多少のロスが出たものの、小腸は平均巾が5cmで、長さ360cmのものが10本、180cmのものが15本、95cmのものが8本となり、大腸は平均巾15cmで、長さ150cmのものが1本、200cmのものが1本の資料を作ることが出来た。出来上がった資料は虫などの害を受けないよう標本箱に入れ、防虫剤としてナフタレンをいれて保管した。

2-3課題・おわりに

加工した腸皮の有効利用を検討するための情報調査を継続する中で、当初より念頭に

あった腸皮製パーカについての文献（Hickman 1987）の表紙写真に掲載されているアリュートのパーカを確認したところ、筆者の製作した腸皮には大きな問題が存在することが明らかとなった。筆者は、筒状の腸を切り開く際に、腸間膜との接点である少し厚い部分を目安にして切り開いたが、写真に見るパーカの腸皮はその腸間膜との接点の少し厚い部分が白い模様となるように残されている。つまり、本来切り開くべき部分とはまったく反対の部分の切り開いていたのであった。この切り開き方が、伝統的なデザインを重視したものであるのか、製法上のものであるのかについては判然としない。文献によれば、セイウチの腸管を尿に漬けて発酵させ、余分な組織を腐敗させた後に水洗いし、空気を入れ長いゴム風船のようにして腸皮を乾燥させた製法が知られる。この方法で乾燥させることで、腸間膜との接点を目安にしなくても容易に切り開くことができるのかもしれない。加工とデザインを両立させるアイデア・知恵には敬服するばかりである。

今回上記のような製法で加工するにはいささかの不安もあり、腸管の切り開きや、洗剤で洗うなど本来の製法とは明らかに異なる独自の手法で製作したが、今後の保存や活用上何らかの問題を引き起こす恐れがあることに注意しつつ、機会があれば本来の方法で製作したいところである。

素材としての腸皮の特性を把握し、今後の博物館活動に利用する為に、民族資料の素材について造詣の深い弥富に実際に腸皮を利用してもらい、その過程で得られた情報の提供を依頼することとした。当初より念頭にあったパーカの製作について協議を行ったが、その方針や製作方法については弥富に一任することとした。その後の経緯、得られた情報などについては、次章の弥富報告に譲る。

3. 腸皮製バッグの縫製について（弥富）

3-1 はじめに～製作に至った経緯～

筆者は、1985年に日本民芸館（東京）開催の「アイヌ工芸展」を観て以来、民族工芸に関心を寄せるようになった。繡衣・アツシ織り・花ゴザ・木彫品の他、白樺・シナ・テンキグサを材料とした民具の製作過程に興味を抱き、札幌転居を機に製作を始めた。北海道内外の博物館、資料館を訪問し、各館の学芸員諸氏に教を請いながら、製作を進めている。

2003年、北海道立北方民族博物館所蔵資料の中に、海獣の腸皮を使ったパーカが在る事を知り、当該資料についての情報収集を始めるため、市川に相談した。市川の紹介を得て、同年7月に北方民族博物館でパーカ3点（H2.113.1、H2.113.2、H2.33）と、同じく海獣の腸皮製袋物（H5.23）1点を調査することができた。

この調査結果に基づき、当初は市川から提供を受けた腸皮を利用してパーカを製作する

予定であったが、腸皮の特性を把握しないまま1作目にパーカを作るとは、技術的にも問題があること、また手元の腸皮の幅がパーカを製作するには幅が狭いこともあり、市川との打ち合わせの結果、バッグ (H5.23) を模して製作することに決めた。



写真1 原型とした資料H5.23

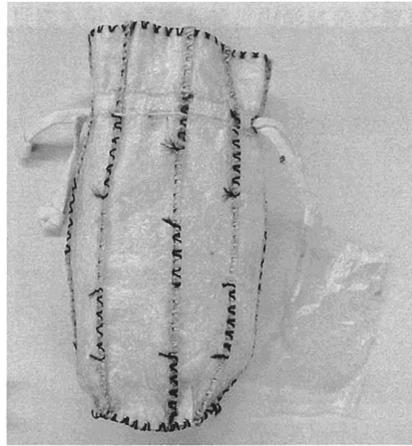


写真2 模造したもの(D18.4.1)

3-2 製作過程

北方民族博物館所蔵のイヌイトの原資料は、巾約7cmの腸皮を6枚はぎ合わせて作製されているが、手元の腸皮の巾が約5cmなので8枚はぎにして、資料よりも少し小型のものを製作することとした (写真1: 原資料、写真2: 弥富製作品)。また、当初はパーカを製作する予定であったため、当該資料の調査は十分とはいえず、以下は調査時の大まかな採寸と撮影した写真に基づいた製作方法であることをお断りしておきたい。

【材料・道具】

製作にあたって、以下の材料を用意した。

- 腸皮 (写真3)
 - 胴側面用 巾約5cm 長さ19cm 8枚
 - 底部用 巾約5cm 長さ9cm 2枚
 - (巾をはぎ合わせて直径9cmの円状にする)
- 木綿布 (黄色)、糸 (写真4)
 - 胴裏用 巾26cm 長さ19cm 1枚
 - 底部用 直径9cmの円 1枚
 - 紐用 巾2cm 長さ40cm 2枚
 - 縫い糸 腸皮を巾2~3mm 長さ30~40cm 15~20本
 - (溼らせて縫いをかける)
 - 飾り縫い糸 絹糸(日本刺繍用 1mm位)
 - しつけ糸 胴に底をつける時の仮縫い用

- ・針その他 針 縫い針（腸糸よりやや太いもの0.7~0.8mm）／
ボールポイント針 DMC #24
- 小皿 腸皮を湿らせるために、水を含んだコットンを入れる

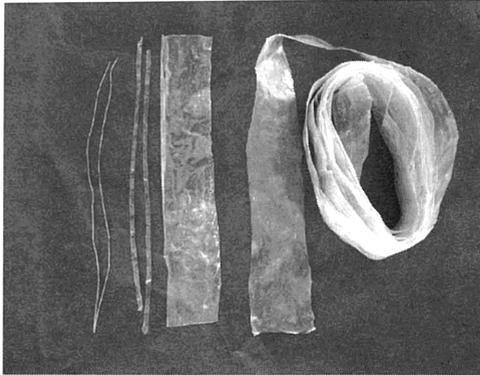


写真3 材料（腸皮）

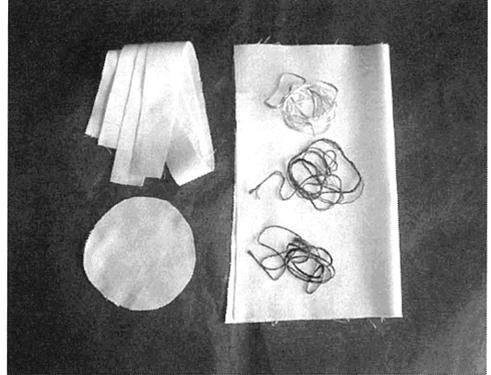


写真4 材料（布と糸）

【製作】

原資料の調査結果を参照しつつ、以下の手順で製作を進めた。

①胴部の縫い合わせ

胴部用の腸皮の縫い代3mmを内側に折り、軽く折り目をつける（図2³⁾）。2枚を外表に合わせ、腸皮の糸（腸糸）で折り山から2mmの所を2~3mmの針目で縫う（図3）。腸皮・腸糸ともに損じ易いため、少しずつ指先で湿らせながら、1針抜きで縫う（腸皮の損傷の傾向については、【腸皮の特性】を参照）。この縫い目は飾り糸をかける為の足がかりにもなる（写真5）。

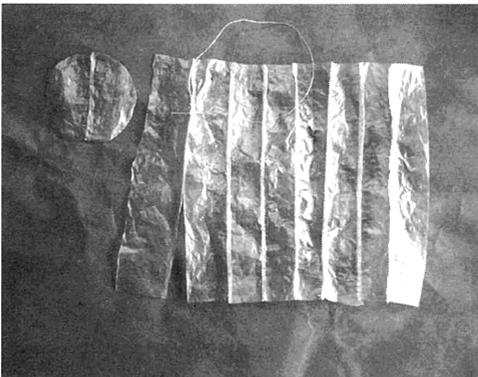


写真5 縫い合わせの工程

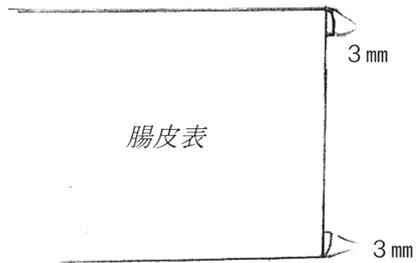


図2

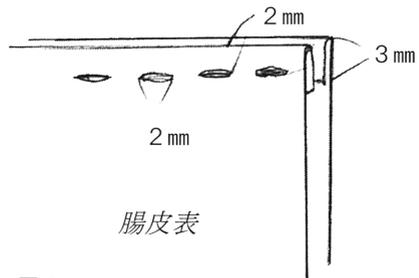


図3

同じように8枚を縫い合わせ、筒状にする。縫い代は左側に倒しておく。

②胴部側面の飾り縫い

底部をつける前に飾り縫いをする。ボールポイントの針を使い、絹糸で図4のように手前の縫い目に針をくぐらせ、次に向こう側の縫い目にも針をくぐらせ、山形に糸を渡していく。配色は、生成とエンジ（または赤）2色を交互に用いる（写真6）。

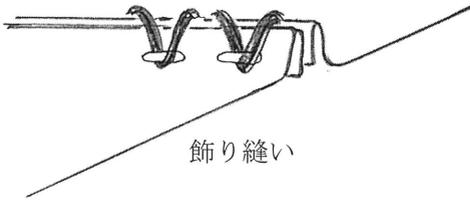


図4



写真6 飾り縫いの工程

③胴部裏布の縫いつけと底部の仮留め

胴部の裏布を用意する。図5のように脇縫いをして、そのまま胴部の内側に入れ、縫い代をそれぞれ内側に折り込み、口から3mmの線を腸糸で縫い合わせる（図6）。この縫い目に紫色の糸で飾り縫いをする。

底部側の縫い代も内側に折り込み、しつけ糸で粗く縫いとめる（図6）。

④底部の製作と縫い合わせ

図7のように底部用の腸皮2枚をはぎ合わせ、直径9cmの円にカットし、裏布とあわせて縫い代をそれぞれ内側に折り込み、しつけ糸で粗く縫いとめる。

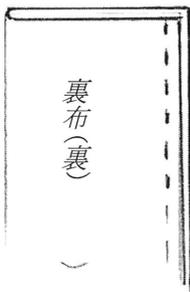


図5

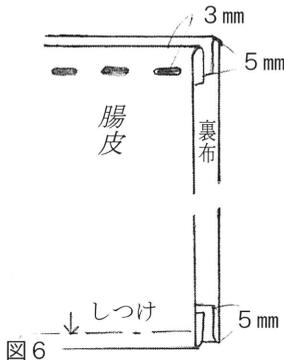


図6

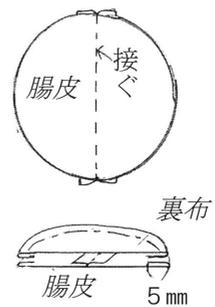


図7

⑤胴部と底部の縫い合わせ

胴部と底部を重ね合わせて3mmの線を腸糸で縫い合わせる（図8）。この時、胴回りに少しギャザーを寄せながらふくらみをつけると型よく出来上がる。③と同様に、紫色の糸

で飾り縫いを行う。

⑥口部の処理

口側に、紐通しのためと思われる2本のステッチをする（原資料は紐無し）。図9の位置に、黄色の糸で粗目のアウトラインステッチをする。

⑦紐通しの穴の処理

両脇の2ヶ所に紐通しのための穴として、腸皮だけに切り込みを入れ、周りを腸糸で巻きかがりをする（図10）。

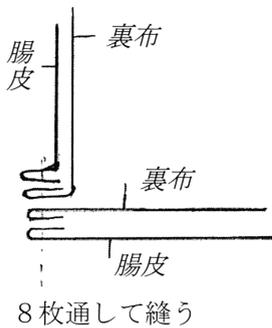


図8

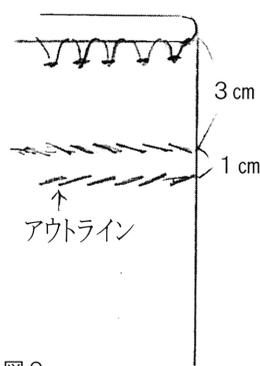


図9

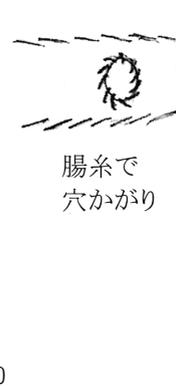


図10

⑧紐の処理

布で7~8mm巾の紐を2本作り、腸皮と裏布の間に通し、結んで端の始末をする。

原資料には、紐通しと思われるステッチと穴が開けてあるが、どのような素材の紐がどのように通されていたのか不明。実際に使用するうえでは必要と考え、この紐を作り添えている。

【縫製にあたっての留意点】

縫製を行う際には以下の点について、注意する必要がある。

1. 腸皮を縫う場合は、腸皮を指先で湿らせながら、針は刺した方向に静かに抜くこと。針を抜く時に腸皮を損じやすいので、力加減に留意する。
2. 湿らせた腸皮はすぐに乾いてしまうので、2~3cm位ずつこまめに湿らせる。
3. 飾り糸をかける時は湿らせる必要はないが、紐通しのアウトラインを刺す時は、軽く湿らせるほうが良いようである。

【腸皮の特性】

腸皮を用いた製作は初めてであり、素材の特性を把握するために、①折り、②揉み、③裂き、④繕りかけ、⑤縫い、の5点について試行してみた。

①折り

折れ線が白く不透明になり、水に浸すと平らに戻るが線は白く残る。

②揉み

揉まれて損じた所は白く不透明になり、全体に柔らかくなるが、水に浸すと皺は無くなり、損じた線は白く残る。

③裂き

縦方向は裂けやすく、横方向は裂けにくい。水に浸すとさらに強くなるが、縦方向より横方向がより強いことは乾燥時と同じである。

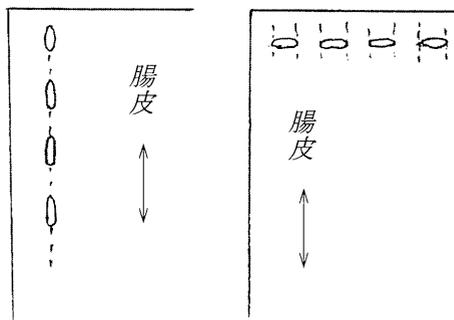
④縫りかけ

細く切った乾燥したままの腸皮を指先で縫りをかけてみるが、つるつると滑って思うようにいかない。先の2~3cmを爪先で揉みほぐして、すべりをなくすと縫りやすくなる。

資料製作時は、ここで紹介した腸皮の縫糸を使用した。種々試行の結果、腸皮をごく細く(1~1.5mm)裁断し、これをそのままテープ状の糸として縫うことも出来る。ただし、湿りを与えることが必要である。

⑤縫い

乾燥した腸皮にランニングステッチを2・3針縫って針を引くと所々破れる。縦方向に縫った場合は、図11のように縫い目の線に沿って裂け、横方向に縫った場合は、縫い目の上下(縦方向)に裂ける。このため、縫う時には必ず湿らせて縫う必要がある。また、糸の引き残しにも注意が必要である。



腸皮繊維に沿って破損する

図11

[補記]

2006年11月末に北方民族博物館にお礼と報告を兼ねて、作品を持参した際には製作過程の記録を残していなかったため、今回の報告にあたって新たに製作しながら図を描き、写真を撮り、記録することになった。このことから、掲載した写真等、本報告の細部に関しては北方民族博物館に寄贈した資料と若干の相違があることをお断りしたい。

市川から提供を受けた腸皮を用いて製作したバッグは、10枚はぎで製作したもの1点、8枚はぎで製作したもの2点である。試作品として製作した10枚はぎのものは北海道大学植物園・博物館に寄贈し、本報告に用いた3作目のものは製作者が所蔵している。

腸皮に関しては入り口を少し覗いただけで、まだ解らないことばかりである。今回の製作方法についても妥当なものであったかどうか、心許ない部分が多くある。今後、残皮を用いて縮尺したパーカの製作にあたりたく、お気づきの点などご教示いただければ幸いである。

4. おわりに —評価とまとめ— (齋藤)

以上のとおり、この報告は資料の実見と限られた参考文献をもとにした、実験や試行を含む製作過程の記録である。市川・弥富も述べているように、伝統的な方法に則ったものでなく、完成品も原資料の正確なコピーではない。しかし、序文にも記したように、寄贈されたものを手にとって見ると、その素材の腸皮は半透明で光沢のある滑らかな仕上がりで、指にはさんでひっぱってみても破れない丈夫さを持ち、質的には実際の使用に充分耐えうらと思われる。縫製も原資料が6枚接ぎであるところ、本品は8枚接ぎである点と縫い糸に腸皮を用いた点を除けば、原資料に近い大きさ、ほぼ同じ縫い方、装飾が施されている。細かな縫い目を見るとき、作り手の手間に感心させられる出来栄である。

モデルとなった当館所蔵資料 (H5.23/写真1) は、収集時の情報によると19世紀後期の西部極北地域 (Western Arctic) とあり、アラスカ西部エスキモーのものと考えてよい。大きさは上部の幅が11.6、高さ22.3、底部の幅が8.1cmである。使用および経年により、素材の腸は皺が多く脆い状態である。一方、寄贈されたもの (資料番号D18.4.1) のサイズは、同11.3、18.5、6.5cmとやや小ぶりである。

寄贈品は参考資料として登録し、博物館職員がレクチャーや解説などをする際に見せたり、状況が許せば触ってもらったりなどの活用を考えている。展示室のガラスの向こうにある資料からは得られない、質感やその軽さを体験してもらい、間近で縫い方を観察してもらうことができるだろう。

腸製の衣類を多用していたのは主にベーリング海の沿岸地域と北ケベック地方で、当館の収蔵品はすべてアラスカのエスキモーおよびアリュートの資料である。これらの地域では、防水性が高く、しかも蒸れにくい上着として、雨の降る夏季、船 (カヤック等) に乗ることを含めた水辺での作業、また儀礼用の衣類などとして着用されていた。縫った糸の間にさらに糸を掛けたり、挟み込んだりするのは、装飾効果のみならず、縫い目をきつくしてより防水性を高めるための技法であるという。

内臓を利用した物質文化は、北方をはじめ広範に及んでおり、アイヌも油入れや水筒として、アザラシの胃やエゾシカの膀胱を利用していたことが知られている。当館に展示中の油入れはトドの食道を利用したものである。シベリア・エスキモーなどでも、トドの食道はパーカの素材として耐久性や色などの点でアザラシの腸よりも好まれていたという。動物の種により部位により異なる内臓の皮の質を熟知し、適切に利用する知恵は、北方の先住民族ことに海獣狩猟を行う人びとにとって共通するものであったろう。

現在のアイヌ文化伝承者のなかにも、エゾシカの膀胱などを使った油保存技術は伝わっている。しかし、海獣の利用技術を伝承している人はほとんどいないと考えられる。道内で腸皮素材の実用品を製作しているという事例は、寡聞にして知らない。腸皮の扱いに関する経験を記録として残すことは、意味あることと思われた。

また、この腸製品を作る試みは、大学附属博物館に勤務し、水産関係者とも連携しやすい立場にあり、動物標本の扱いに慣れた市川と、さまざまな自然素材による民具製作経験を持つ弥富両人の熱意と技量によって実現した。現在、野生の動植物由来の素材を入手することは、個人ではなかなか難しい。まして初めて扱う素材では、解決しなければならない点が多々ある。今回、新しい知見を得て模造品を完成させることができたのは、互いの協力による成果であり、博物館をめぐる活動の一例としても紹介すべき取り組みであると考えた。

短い期間で執筆にあたったが、記録として、また資料の評価として文章にしていくなかで、それぞれに課題や反省点も見えてきた。今後、補足する情報などがそろえば、改めて紹介したい。

謝辞

この稿をまとめるにあたって多くの方から御協力・御指導をいただいた。特に北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園助手の加藤克氏には懇切な指導と多大な助言・激励を頂いた。トドの腸の提供にあたっては元北海道大学大学院水産科学研究科星野広志氏、腸の長さについては道立釧路水産試験場後藤陽子氏、小樽水族館角川雅俊氏、腸管組織について北海道大学北方生物圏フィールド科学センター生物生産農場・日置昭二氏らの協力・情報提供をいただいた。お名前を挙げ切れなかったこの他の多くの協力者の方々に、この場を借りて深く感謝申し上げる。

〈注〉

¹⁾ 収集時の英語の記述gutまたはintestineを「腸製」と訳して資料名としているが、いずれも古いもので、製作者をはじめとする付随情報が少ない。文献によれば食道など腸以外の内臓膜の使用例があり、他の臓器である可能性もあると考える。また、単にseal (アザラシ) とされているものの種も不明である。

²⁾ トドの腸の平均の長さは、小腸が体長の約28.5倍で、大腸は約1.2倍という報告があり、長いものでは100mを超えるとされる(後藤 1999)。

³⁾ 腸皮は腸管の外皮の側(光沢のない面)が表側になるように用いる。

参考文献

後藤陽子

- 1999 「北海道沿岸に来遊する鰭脚類3種の摂餌生態および栄養動態に関する研究」(博士論文) 北海道大学大学院水産学研究科提出：函館

HICKMAN, Pat

- 1987 “*Innerskins / Outerskins : Gut and Fishskin*” San Francisco Craft and Folk Art Museum: San Francisco

本多勝一

- 1963 『カナダ・エスキモー』朝日新聞社：東京

星野広志

- 2004 「北太平洋西部海域に生息するトド *Eumetopis jubatus* の有機塩素系化合物の体内蓄積に関する研究」(博士論文) 北海道大学大学院水産学研究科提出：函館

ISSENMAN, Betty Kobayashi

- 1997 “*Sinews of Survival*” UBC Press: Vancouver

金子量重監修

- 1984 『暮しの設計 伝承シリーズ8 和紙の造形』中央公論社：東京

加藤嘉太郎

- 1983 『家畜比較解剖図説』上巻 養賢堂：東京

北村哲郎監修

- 1989 『別冊太陽 日本のこころ67 日本の布 原始布探訪』平凡社：東京

OAKES, Jill E and RICK Riewe eds.

- 1998 “*Spirit of Siberia: Traditional Native Life, Clothing, and Footwear.*” Smithsonian Institution Press: Washington D.C.